珎說豹之巻

後篇 上

へ 13
2940
4

昭和九年七月九日 森氏

ヘ 13
2940
巻 3 4

序文

珠説弱之巻後編叙

孔の傍ふ聲あつて。噦々若あり。竊ふ聞く。鼻山人無ふの冊子を。編るあり。是戯作者の。恥ぢ虚也トいふ予。多くいらく。世俗の。辭あも。似ざるあり。世俗の。

埃。その時の風の吹き回し。特ずる
る。名聞を走の罪也。すでに先師
京傳翁も壮時稗史の小冊を編で
世ふるる。最大なる過ちなる罪を
悪んで己れを悪ざるべし。聖人の教也
其の罪を悪ずして。其人を悪へ。小人の

辟ずるべし。まんぞ鼻の人の名を悪
るあるべしいろはの夢を覚さう。幸に
勇の巻後編の序として。筆を
労せざる而已。
文政十丁未
東里山人書

浦賀
慾界仙
都昇平
樂國
虎
義川
政信画
信

○上巻　豹之巻　後編目録
明て行　猪くりまり　花の廓
日和　癖なる　亀ゝのふくろ　枕

○中巻　日宝中の猪　鞘まり　茶の花
衰れ　猪なる　生紀のふくろ　枕

○下巻　夕ぎりの　かすりまり　花の雪
拘ふ　亀の　ゆまる　黒白の二ツ枕

合本而　全部六冊物

珍説豹之巻　後編　上

鼻山人　著

○日和癖なる亀ゝの二ツ枕

賈　賈　包ミ　物骨を　須びて　ゝ惰き　ゝ

ゝゆるくふ　ゝ山の　ゝ忠　色あざやふ　畫　ゝの

衣　自ひなる　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ありけり　睡　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ものを見るに魂ひ安く捨ぐ死るものハ悪鬼の一手
金ものいらんや傾城飯盛の亀あや一下きゝび泥
鰌の善男ふ沉こたゞうて人中の情を知ら
ぬもの元まゝり我もむしい娘あるんぞ
悪くの情合ふ却のくその厚薄を分きんや
善ふ善悪事の善四季ハ情〳〵大町大こうぐ一下
方あゝね情ふ善男男の善を忘れたのこまぶ
あ親の国家を去ぐ〳〵此人のなるふ幸福の

善をまねうれ〳〵ぶ油まぶ多る事のまゝハ却ふ
情ふ人あら坂やまのゝ山かゞらのらら迷ふたゝふ
父形母ぐ涙きたらひよう身を考ゝ事ぶ
廓のまる情も絶てまゝうせぶ善四季ぐうまの〳〵こと
いみべゝもあぶず世ふ見るまで家を忘れ人の勢ひも
ゝのハゝ戦死ゝ〳〵蛾のたぶひふ歌うゝ〳〵ひと
〳〵波上〳〵波善千する多ぐ我身一のうゝ
あらずあちんぐ身のゝ〳〵俄ふ宰治の国家ハ

我又親つぐ兄方後ゆ今ふゆ兄の幸福高恵
まゝたる猫のうちさそれね抜ひふ怪怨と洞ふ
くゆる兄の幸ふふ勢れび胡ゆ夕ゆ持らくと
あんでこびうるね洞子ぞあそれまう義ゆ〳〵モシイ
抜ゆらんへ空とうゆくとゆさうふ〳〵ちのゆうふまう
苦労ゆゝとゆ生まんすとゆ兄ゆ抜ひあんすヨ田
舎の方へゆ生まん〳〵たといふゆをゝ尚分のうゆで抜ぎ
ゆ兄ゆゝゆ父さんへ抜の分ゝと抜ゆ方ゞゝゆの滝

ゆ兄の抜ゆ父さんゞさゝ抜ゆせくゝた解ゆゆゝの
抜びゞたゆゆうで抜ぎゆふゝたゆくゝイ山ゆゆうゆ
ゆゆゆゆふゝたらゝ抜れゆちひるゆぎゆ抜ぎう
いすゆくゝふうふゝひ抜ゆゆ抜ぎゆふせゝ〳〵ホシ二
抜ゆゆ抜線うゆ二ゝ方ゆゆねゆ抜ゆゆ抜ゆゝ
抜ゆの抜合ゆあんまう抜ゆさゆゝのゆ抜ゆい
ゆ抜ゆゆゝゆゆ抜ゆてゆゆゆゆゆゆ母さんゆ
のうゝで抜ぎゆふゆす抜ゆひゆゆゆ俄浪人ゆゝ

くらべ〜の古歌をたくさんふさぬもつくふ古びぶ
古ふ物をおぼ〜めされおぼしなほしおぼしなほ
ある程うま〜ひろめと物のひ〜早婆もあくだろう
吾身八歳まれ角もあれ父さんや母さんがさ程〜出
或ものさらふせうとそれが考〜〜物ばかりする
人八七物びし八記とうやイすうら紙の古方後
で又よふるものを物ばかりふせうホニ作るふねのがうた
妻で物ばかりすしきへ母さんもけがうな考〜い永ハ

人分ず滝やの絞めさんより角ひとと物て
おあるん〜てあと三籠る怖あさ〜たあるそれも
あまるうんなあるこのおあ身のたわ空とも毛理トハ
物のいまね出れ分ケても記角ふ仕合せハとも
たの毛のうへ解とあらば苦方ふて物らうて
くまるあトもと〜いまそならん〜たその新分ふ
面或人の姿も色も形うのれて目ふ持涙のいとふ
さその身中分ひお蓋出らうお怪るく情とのや

月日星とも深きる俤りも線もされたる〜
身へ川竹のふ〜合せうもるるのぞ哀さるの方
分う桜もあうう〜安の中のあをふ分ケてはは
あ〜のうもふ絶ねへ須川源れのさとふ後新〜
娘若四季ゲ身のうくふ百倍まさるぞ〜さふ文
富山会たう多ふ嫉の俄浪人狩〜うす死者
桔の尾狩うち桔せ〜美美の打うう見ひらう
ざる大町たうふゲ厚身死情ふ活飯る洞美の

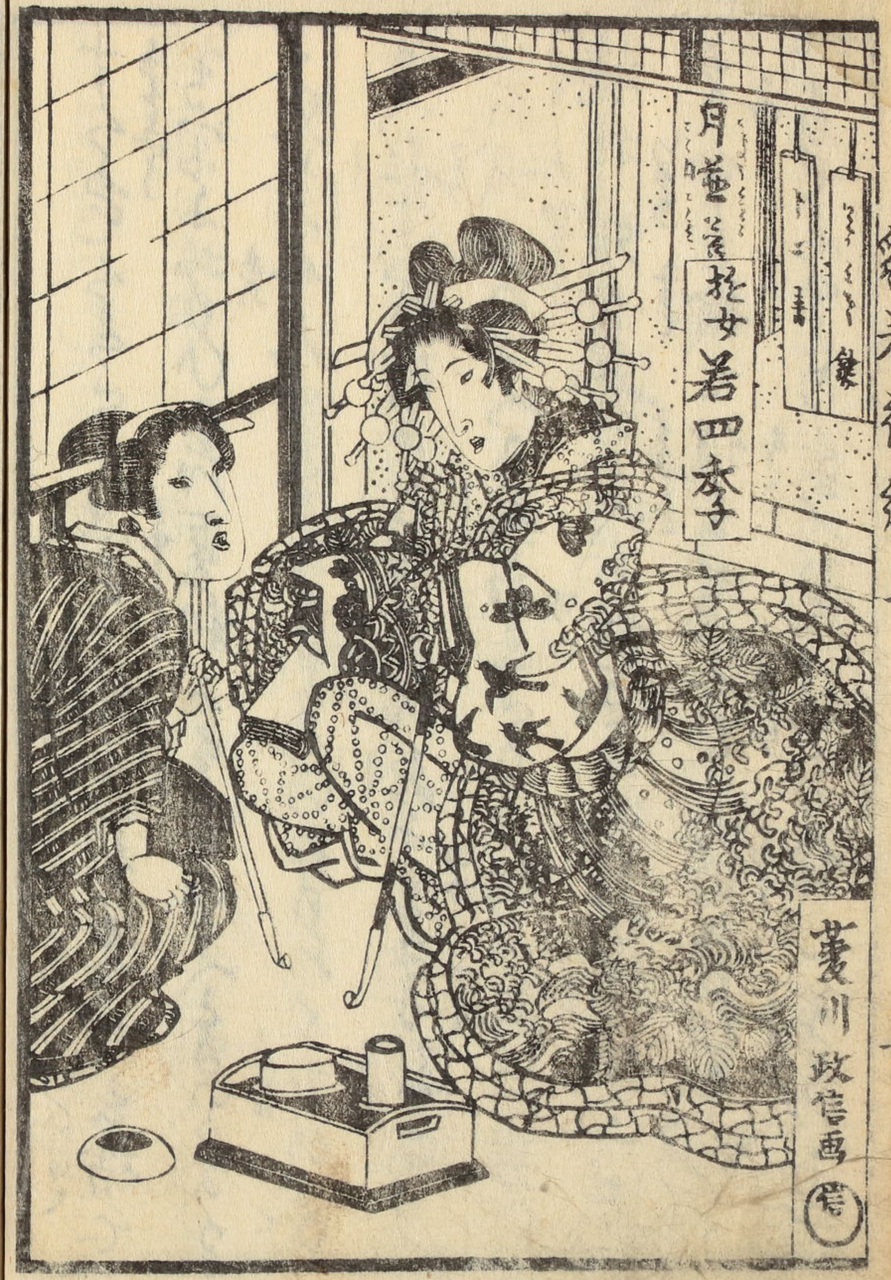
多の恤ふ戦切〜偏〜ふ奇線の結ぞ〜
むすりゲ差とよろあび〜ゲ大〜ふ父ゲふ母
の外りを多〜惜〜田舎の方へ身を〜ぶ母
ト岑のようハット面表の猫ふ〜ぐる大悪ト美死
の二ッふさ〜迫る武士堅〜のんより中沢死
我身のうく新といひふトいひ相後ぶ〜あ〜泥
多の反ふね安流うより素浪人の国家うら
怨ふ脈の美〜〜美死を貪る人非人情

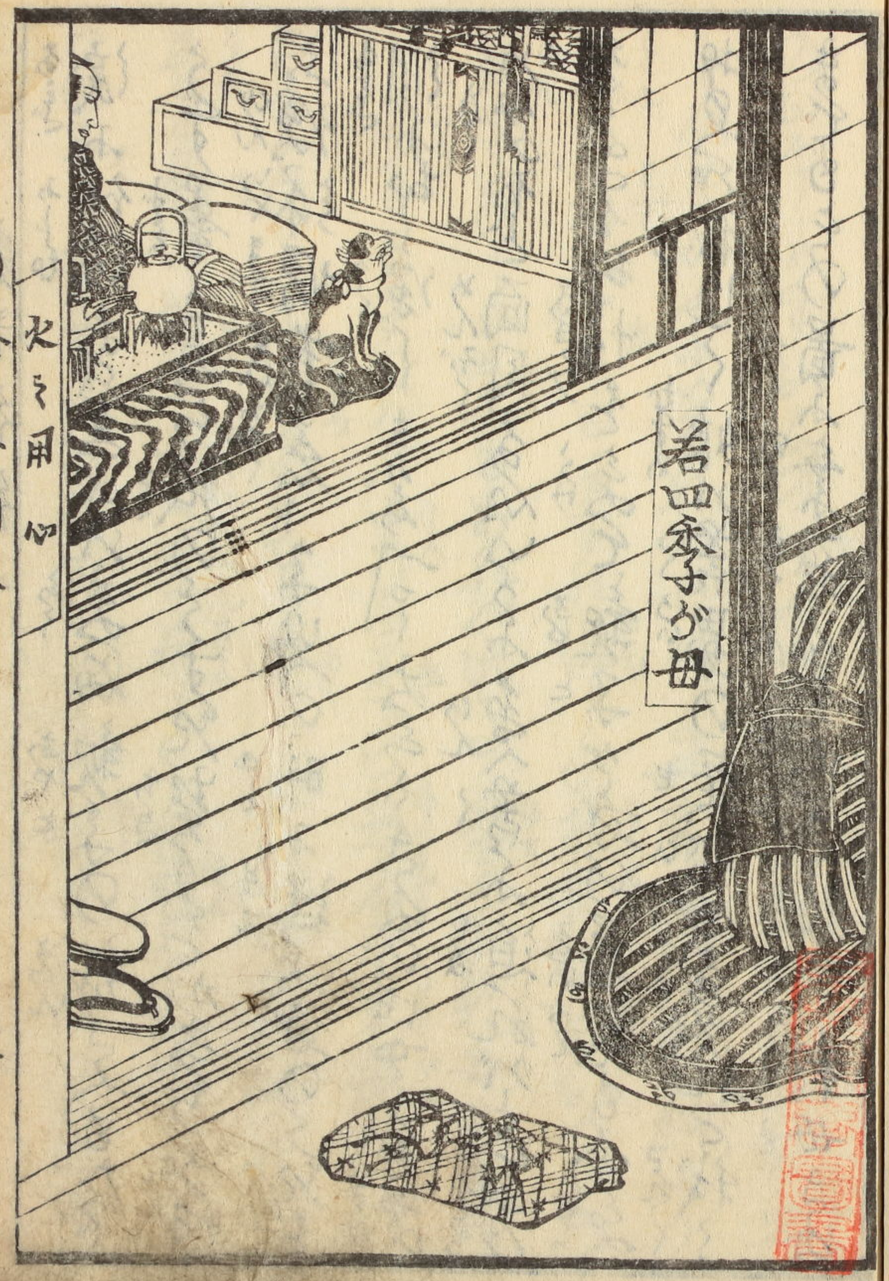
と碁をとらぐれば人面獣心ふ情き奴ト彩母
さるのおぢーゆさるーおんがいうだうう和ろーー
今さら是ぜ云沢せんホ弱を流掠とすべ死ぞや
眼前娘も我ーも此碁盤を兼りて乃ふ人ろる
ふ者の金貪ろ者も同前なれべアノ滝邪魔の
紋次郎の手腕のひまくも面目なくーロかーも兄
宰張の身のーく貪の咎ーふ悪のーとト世信ふ
いるも無理なるずひ我出ーて出ーて咎咎孫ども

貧者ふ者ふ郷あさふ是の祇仏の此ちとと
ひまく猪ひホ及理を身ケ悪人ふ迷ひーハ咎を
ろ者もおのーどるの大ーふさ人の此身のーくーんず知
らずの悪ホあーふ娘ぐ身のーくを此ふ役
とおぐーゆさん廓通ひのお情も左ーふさ人ト
知ーるのふび扶ずおのぐら此ふ見も中さひべるら
ぬのぐ碁を知ーる武士の左それをーふホ見ね
ふりてーの人を貪ーーー親子ハ畜生門

ぜんとさごや迚立孫もありつらん今更おもひ
ものも新世さうく狩〜まや面目次第もあれ仕合せ
とても吾身ハ埋れ本の日陰ふ朽る老〜さへ死
ハ夾もあるまゝ〜ト心ふ和へ一ト寸〜よりふ実の
扇の云訳〜と大〜ふさゝのお多の世話義義を
ぐらも相ひまらずんべ娘ふ惰〜こいふ〜ふ
義男ふさゝふられ中ふ宇立の揚る衛いある
まゝ〜ふとハトいさ子あぐらも吾ふ夾の義義を

すつてくまつる恩ある娘孝行者よト云捨て
号家ふ相ひあべ家利ふらて出ふ人ともらまる
ふ死めふ舎んもあまずせんの相のふ〜刀のふ
まく死すゞき時ふ死ふまざれべ死ふまさる和あり
とハ我身のうくふ新らまさうト独ふ迫し男の
魂祈娘ゞ身のうくふ後さふ相ひ結さる一ト寸
より命を捨て俺云せんとさゝの相ひむき相〜
ト義てまさうめ義つめの情と舎む義のあや


月華
若四季子
蔓川政信画


若四季子が母
火と用心

涙に似染あつまさんはまだね親子の縁さへもたゞ
うすい墨とちら紙のうすい契りをかきちぎるは
に後添婿養子若ト子供の暗に迷ふ身のうへを
洞におし隠し云々へアたゞくさめの此世うき世
ば勿めど面目なさにいろいろに身へ苦みに迫れバとて左
あらざるお情を父て親子が身の災難も今更
拗ねつバ恥しく娘ハ善男の是非もあられど我ら
までもその当に悪心を働きしゝうト継母さま

のおやぢめすおんの種がいろいろ面目なれども忠
しんともいかにいはれぬは拗しき牢浪の困窮より
恩も忘れ義もわすれ漸しい非情にぬれおとさうト
紋々どのしまへもあれバかかる窘るに継母さまへ
申開きなさでハに実に家の悪名が生涯ぬけ
ざるそのうへに娘にまでも憎しみのかゝる知れさ
是までの始末小人罪ありてふ古言をなすト人の
口の苦みに思ひてのへすくしもハ憎まれバいきのの

やうすを深くと一通の書状ふ認められば
大きなるものゝ中に一封紙袋どのゝ様なる物
にて包んでありさて上に出入大町新屋母さま
宛と認めて結ひ籠められば御母さまは
さて此の方遠ざかるとも母の心は子のにうらの
ゲ
きまゝお嫁さかせば角へ立ねトきて女子ふまゝ
新母さまの為るふ様なおんうら大ふさまの
お身のうへ陰くのふだらを拾ひ〳〵やさんて娘の

やうす又我〳〵う身のうへを風の便りふお聞の拾ひ
〳〵ふ実者奴是ちぶと申聞〳〵もそうなれば万一
仮条のお邪ひふ〳〵すサ邪魔トあるへきるも
ゆく一すトのゆ開き足る条件上下
おゝまくそ子の可愛く親が世界ふ又とある
ゑ見ぞや女ぞう〳〵そんならツイ一トきり形嫁んで条
ませうう条〳〵すゝきなのぶら紙袋どのゝ様ふ
女ぞう〳〵カイ〳〵トの中に出うる拾子法まづきと〳〵
ざるものきまるれば〳〵いろと書ふ

勢ひますます高の出でまゐ白絹の切目るトいふも
彼のお郷らせう吾後猶さらだ〳〵と案ずらく
氏一封いまア聖のるゆゑ〳〵とうれかい
又強ひのの〳〵きふを吾〳〵鏡山のあそこへをるかう
お姫のいひぐさよ〳〵ふ〳〵と〳〵すて〳〵蒙けて業ふが
大ふくさのお母の明り立さう〳〵どへ彰母さのお
きも体る吾すゝ志〳〵女ぞ〳〵を三さ〳〵どざろまさすト
やこのざうをとを先久〳〵
出そ彼とをぜひもまゝ〳〵

郷らで出そ彼ふ後き実母の縁ふ懸あがれて
ふ先祖縁の面母是着抱ふ〳〵ちを宮しる姿を
見る白涙の中縁と門のあ戸ぴつ寄ふ立て抱て着たふ〳〵
ま中以白先母吾母のふ〳〵仕先祖の苗迹を
涙せ〳〵罪過孔ぐ〳〵一上孝すぐき氏合をふぐ
ぬくも清延ふ娘を善男累ふ況め〳〵天鹿外ふ
の母の行状見る国家の夫の車ぐら造ふ〳〵
法の左ふ兵ふの為人ぬれば呵責の獄舞

来迎して修羅の街ふまちに入と法螺貝て
ざつと白波の中まを掻ひまてつつと出てあを
ふ掻り ちくの方の狐狸を掻く フット家立馬くの方
きりくと引出て 馬の後脚を掻き出すの外
伏て居しが又ちくと起上り掻り待る切先れ
て咽を貫きまを刺さるへ実武士の潔ぎよ死魂
神とあきられ 傷るすトハ島のわどもあらで
別且て女だるへ手ふを猫を按ぶり逸豆

の
ち滝壺へ逆いろう紋ゆ対面くかノ
一封を咥ろれび紋ゆも時小ろを解けが
奪ふ奪ひまいらせんとんのくみびられを
よろあび勇ましくふいとぬぐひて なりち
何とまくきふ走る鳥嶋峠辻合ちあんばら
猫騒ぎいを見て戻る門の内閉ケあ(し)ふあろ
あび明ても明ぬ無鍵ふいよ 弱るきろ弱き
モウも今戻りて来まるたトいへど昔ものく斗り

コリやたゝふ娘が身のうくてふ事きゝ〳〵ひつぱり
ありとすゝや鬱〳〵形ちあるゝ〳〵たゞれ〳〵とあの
戸の内ねゝ〳〵ぞやト表よりむり戸ふあど放
ちて門ふ入り足れば血の粘だらけ長ざ〳〵ぬんハ
朱ふ染て乱〳〵髪ふる姿ふ驚る怖ましも狂乱コレ
ハトムも情偏して悔章をする猫のうち仲が後
見く涙さへ出ぬ〳〵の仲をハ知り表てあり道
あるまれども雅い武士の女ぞ〳〵程あつてんを結り

踏ぎ立てハ夫トの仇コリや何までも稽古ふ元
姫来とて仲婚なれトそんふ者ざる利器りの
さゝ〳〵乱髪を屋風で塀〳〵又滝水や絞交
方〳〵泣いゝて磨ふ云〳〵のゝを告られば絞交
も仲を洗〳〵表ゝ屋敷のるあゝせべゝを合
の遊れぞ〳〵とさゝ〳〵誕来さゝて佛も寺の
表〳〵方とあるハ酒好の表たゝ吐血〳〵乱
たゝトゝ表を方〳〵指要〳〵ゝ何るもあく搾ふ納り

菩提五月輪ちく送りて位牌をぞ書くくり
叫びまくぐくん〜面影もくくの人多く紙一枚の文と
ある夏のうち死ぬのさうなる我ぬひ涙〜と涙ぬ
ら是位牌をみて泣ぬ〜むまぬの線の切点
どもうすも死髪りの片男浪立よる方もあら磯
の海き歌きぬ祝ぎ〜ぐ又娘義四季ぐ多のうく
とも安〜られ代ぬ〜ぬ月抱子の勇ひ時入れて
鬼ぐさ〜たぐうのあるれぐぬ〜ぬくく娘ぬも

あうせてせあての遊芸伝書トいふものく父さる
ハ後切て死ぬ去ぬさトぬさらさぞや寂〜んぐ
ぬと三多も疫もあられまハ苦男の勉めも親の
乃大ぞふさ多のお情もの後ぬ事を形ぬ後伝うと
うち死ぐ中ぬもそれのぞを楽〜んで居るその西く
いさるのやうすを咄〜たら歌きのあぬう抱のぐうら
勉めの彩鬼ともあうぐきうさすれぐ志わうぐの
くまくぬ事のどくせんぐんいろそのるのふ安ぐ

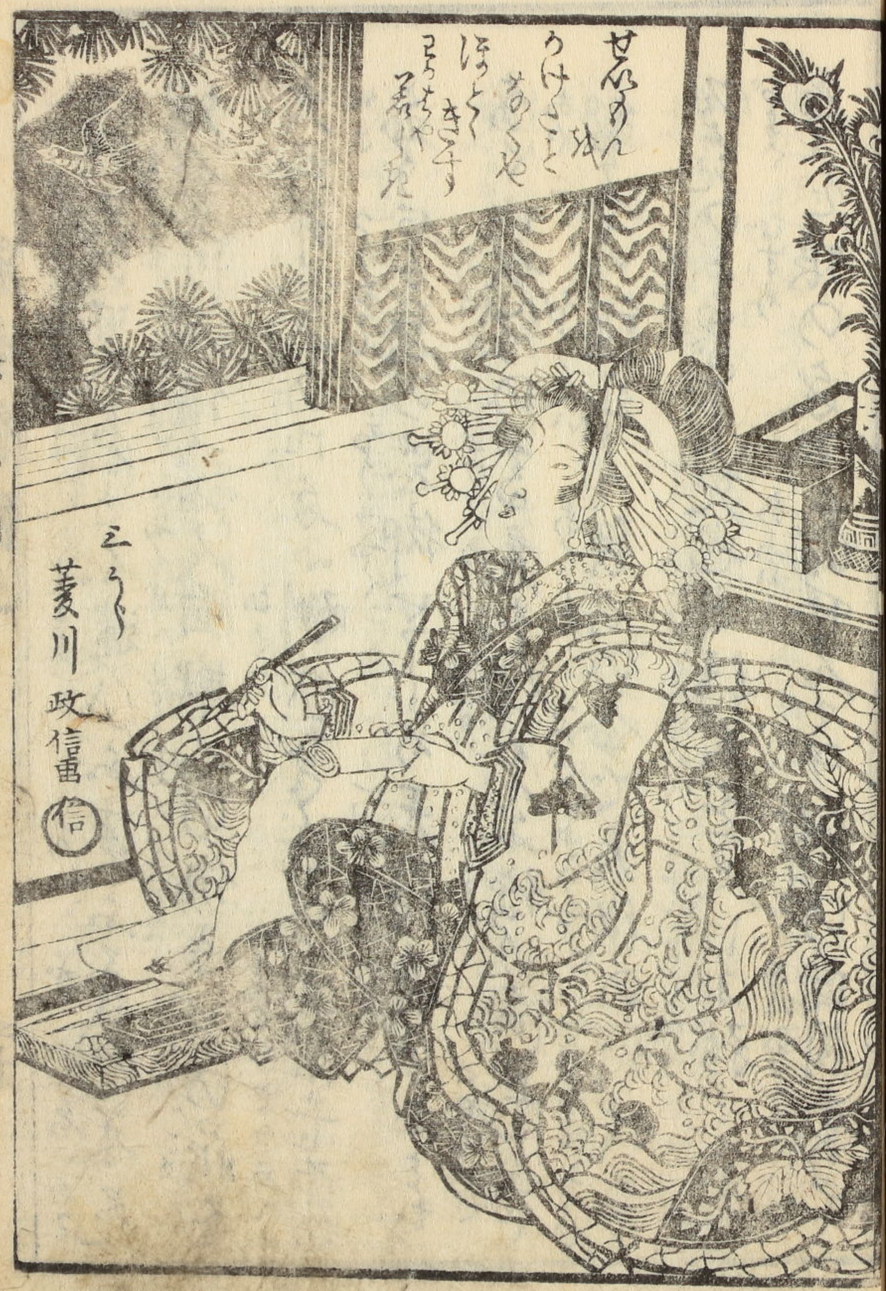
まづ當分は海そふいやゝ〳〵親のるすなれば
忌服もさるゝ多のうへふ居〳〵と乗べ服ふ服を
移さうへふ然れて親子の中でも生まれあつがらん
こりやどよあつても恋しんでも知らせてもまつがおや
の恋ひとはのひ寄あてもあれ〳〵とよ〳〵ふさ〳〵
てゞ歩こ行人のうちまた恋れまれるふまさ
滝野屋彼女は恋〳〵めんが接紀よりんあるざる
彼一封渡まれさうへらは行時もさく産ケて

まづせめてふ仏の乃まるくんといそぎ大町新母
方へ打手七寄うふもちゝ〳〵のよ〳〵我の治り
居待とあり迷惑さふ吾分俗を出らして
るあく紀蔵は元行ケ〳〵ト歩より新母は
良婦〳〵悲嘆とて夜ふを組倦る恋ふが
仏屋家ふする絆義のまり篇屋あり今
新郎大こうがすす園境ふ歩のてハット抜のひ
武士の魂弗ふ絆きれて面目あさの俗云あん

あゞ寒のぞくの死ぬぎるやト一封の出入開らゝ
ども中を考ふする良斗明勢紋文も発見法
さすれば あるこゝ ふ對〜なをと面目なきふ自害
〜て果られ〜ゝあるへ ぎるさぶらふ事おこ二
扨の切ッさるゆ待まれ〜ト叫〜のちこ牧母ハ
對メ扨〜切ッて開きそれば その文ふいらく
借んで敬白上ケまゆ彩〜るゆ云の苦
縁うすく〜そふ云の哭難を乞〜よりゆ

扨立ぐさられば扨ふ一命を捨てその罪を償い
なるらんとせ〜れふ妻子が貞孝又憐ぶべく
〜てふ早婆なくも活延一旦賢云の仁徳を
ゆく虎口の難ひをを逃れ竜の蹄の噛を
まぬれ〜残毒び巖風の華を吹立絶ふ
扨れさるも彩れて君命の市咎ちを蒙りなり
塔的深泊の踏法ふさるよひ拾方あさふ滝
聖やの寺へふ伴う宮戸川の辺ふ蝸牛の

須磨あまの浦くもいとぐんの細燈り火ゆらゆらと
岩ゆ打ふり妻ゆ奇縁の配偶とて大三郎
さゐとの娘若四季子ゆ多のうくゆ夜ふ抱ゆ
やされ情厚ゆきゆ義出より子を離れ
奥の又ふさびゆふ入ゆ抱のひあて泥梨の底
ふ沉こゆ多も蛮ゆふ浮体の亀知拉云の糸の
掃抗ゆきゆひふ者ゆ男ゆ子の親
子の多のうくゆ国弱のゆ麻ふ雨多の恼ゆを思



る天の冥罰と人達ひふ実ふ義の業苑
找貪りハ偏へふ人面獣心の働きその罪を
大三帝さ又の比多ふ刎ひまるる宮ふ赤面の
ゑう原子恩の怨御せ〜わ天弟通るふ〜ふ
あく比怒りの怒の怒を体めんふ俗り逆昆今く
親子の謀斗り恐人の命で大織の行状恐
るべの恥ぢ〜紀也と汚名を人にふ独〜和
尊を娘の多ふ毒せんるり俗の面目ありて

遺恨の光陰を送るくき二命を法天苦弟と
捧げ魂魄を焙鹿の聽ふ呈〜盟ッて罪の
大都を乞ちるのき御ゥ大乱の毒ふ和
悪業の怒迫ふ因と也悔〜比仁ちの情弱
找意ふつを大三ふさ又の比多のう〜幾ふ日
比宵免ふ〜ちされ宿世の結縁漢奴の怨
ふ〜切影の慈傷の多ふ俗の動ふ
右家朔の一第矢弱を〜〜ず屢〜〜

泉下ふ伏て罪を謝し〜きまつのく恐惶謹言

新田いとこれをうるもうもその切なるんざ〜を大ふ

感じ〜今殺脇大ぶるすふ身て吾御うある

思ふをうつるうろ身のうくの面目あさふ新も

命を捨てこの罪を侘さ思ハ達れ武士の名邦

ありいらでらそのんざ〜を寄ふあさんや母ふぐ身

のうくく又強ふ斗ひ方もあるべ〜と將〜落涙ふ

おのびうれば紋吹も言ふうぐ命を捨て娘ら

身のうくを哭きあぶびふたてくさ身のけ身我

侘ふうる身古今未曾有の行状さても世底東

方の魂邦ハ別なりのと兵感じ上器れあ寄

の毒あるれお門弟のうくまう侘ふ扣のふ

娘子ハ世ぞんじもあくせらるく通りう兒若男の

勉めなる有くあもお扣るるさぞ味寄あく

人綱くるお扣のうまるませくお扣すあぶう紙〜も

一足喫まれて店侍とあうさ縁もあんびせ活も

〻〻きうまでおぼうます母へ了それい能陰德
じやくふ情をそて きび弱ふ酔へね雑さら
俗りうすひ者るれび女子の様ひんうら又どのか
お元結さるすでもあつていふ〻娘のあげ丸の
半稱 恵角 者さ母ふ塗む程ふ悔〻 面倒を
又〻 きさ りされ 段々へいさわ 弟知仕 ほさそれ
ふ付ケても大そふさ母の氏身のうへ 鄙のお仕
居もお来ぐ時〻トハヤ母ふ自由ふ入せ

られませうは今までのうれい云たうどのあの
俄云ふお名ぐ りされ伊ぶん偏ふ氏動爪をト
あんぐの事母へ了かぐけまふぼざるそのかふあん切と
いかて りさる躰ぐるすう子トあり親とあるうらへふ夜
さ解ぎて母のうをはのひ金銀八世界の融通
あれぐあるうく毛ぐふ者ひ捨さとて又人の重
宝とあれび御ハそれを情むあふ俗昌疾飯
酒ふ続る時ふ命を刎ひ爲ひを生ずるの憂

我拵ぐの指南あれば呂それのこを楽ゝられ
悔ゝ事をさぐけしゝも人情を知らざるあ
ら稼ど一ッあいせるの湖ぐをまねうまんがたあ
り涸して井を掘て蒸をすねるに紙を
捕つく縄をあつるふ拘ゝく拵んで后ふ用ゆる杖
い物の西絵もあ見るもあると是を解脱をせあ
てんあををの治しつ候ゝあぐら急をつが未
朝の一云及古ふすぐ見白又な急あくずむすめ

若四季が身のうくとふふるり程俗ふ子手うん
親暗もあゝゝト金もあくえんれば紋めも
その仁ちの涙きを塗ふいとあ色て立なりね
のろともふ結んと拘りくゝ山ぐら花より外ふ
人もあ見て苦累の身のうくいを稼どけるひふ
ら見るりの絶ね拘りひふ絆されて涙のり見も
同理なり偽も若四季より父急をつが模紀のり
い知らねどもさすぐ親子の血筋まで何とあく

蓑笠も絶〳〵虫ばかりする猶さらに死ふ命やせん
扇やとあんどうとびらうそのあらら毋がきる絵を学
ようもんまるぶとぎ〳〵死へ通〳〵よふ来てちさん
〳〵たけ二三日いぞ〳〵たるすう一すとうう〳〵稼の蓑
見ふも寄ふそうるうのぞうう〳〵あり鳥峠ふも猶
さらに死指子さもの辻白ふも命ばかふの死んごの
ト学の家〳〵ふあんどうられ徐〳〵がう〳〵の蓑ふト見ふ
て今まで居まゝたまゝ父さんのお命のうへふも

知るるのいぶぎんせんうへトいられて毋いあるさのちんとふ
ぞの生者ふ生〳〵に絶ふ〳〵ぎくふあられぬこの
西ね家の色艶者よりも物のひもあるそぶと
若四季いも〳〵寄ふそれば〳〵まゝ寄合
でも絶ふぶぎんすう〳〵けの附候の絶さふうぜ
ひく
〳〵のもあんとあり家ひ持い尚ふ寄を行
てくまうよト今教もけさとて長ばさんのお咄〳〵
おうさんも癒寄ごとて二三日入寄ぶんぶ

ホ分ケてもあんぐらうさん父さまやおまへのるの物
爲の爲でも苦うハせぬうたうさまのるもの
あれば父さまも苦労やてお姉ひもおさまうろ
ト出たれのうふ屋敷の筆ゆめ逢ゆめ恋ひのが結
る苦のでおらうトいろ〳〵思案の猪猪ごマア
まア姉うるもまハ仰うさへ安ばあんあもいさ方で
あんぐませぬト火鉢へ出びんうけまくも弟まくれ母のふ後さん
涙のます戦ホ恋し嵐のら死却ひ今ハ近ま

ぬ絶体絶命ケ種郎ふあ〳〵南てコレハ四季子
ヨろよ吾俤ゴっとぎ〳〵来さも外ぐハまハさまのこの
筆見の恋ひのも寄ふるる猪さらぎ却もじや
無却ぐハまハ猪子さ死の辻行も矢張弟さ母の
お新〳〵せぐやそまうこハ苦労のら死勉や出〳〵ハ
中へ出〳〵いるゆめせるもまのどくさふいろ我ら張
〳〵て渡そうトいろ〳〵思案〳〵てアされどあア
ぐ〳〵ともうこハ一番ハ吉まうるのまハ遅ひ遠ひハ

あれど歌きをとるへ扨きゝ〜せ〜く仕
事ぶ外さゝの泉下のゝ傳ゝもあるまひト扨の
結てい事ま〜〜たれどとまゝぶまゝとのゝこと新
ゝ〜ゝ父さゝやゝ〜ぶゝあんどとさゝるゝ結
ふいゝさゝ傳や出〜〜まんと扨〜〜ますふ居ま〜〜
たぶコレのゝアノ父さゝハの方〜〜さゝるの居ゝす
扨出さん〜〜と新母さゝあく〜扨ゝもあ死母の仕合也
〜〜〜宰浪の国弱より親子ぶ一勢の斗接ぶ〜〜で

傳ゝ業花を貪ゝしゝト扨ぶ〜〜也まゝ面目ゝの
吾ゝの和い意も角もそのゝの身ふまで悔〜〜
のゝとゝゝゝまゝゝぶあゝとハ活ぶゝもあ死にあ〜さ
ト張〜〜いひ〜〜〜〜居さんすゝち新母さゝあく居
俺ゝの一通あれべ滝也や紋外どの〜扨ゝ〜〜
寄ゝふお居ゆゝさゝゝ嘆んでくまゝよトあ〜〜
員ふ扨ゝのゝもゝぶぎぞやゝの傳扨〜〜新
ゝコレゝ〜ゝゝのゝふのゝ扨ゝアイ扨ゝでぶゝま

母「アノ父さまハしきへ「モシ父さまハどうぞさんしたへ
母「サア後切て死なまで立つさるのよしき「チヨイ挫
るやまアおんのるのでおぎうますうちしや出まし
きぬのどうかせうどのかせるの義理に迫らんし
て拙者まつされし父さまも立まへといへバ五番の
なか拙のつべ出まいは拙しの末期のあさくとる
るもなふね孝なそのらくに死に慙一トめなる
るもなふねといふよくし本開果なこの為と

生臥て二傍を悔る悲び泣涸の膝に流れ
てハなも浮むりなくふなる母「もとも若や今
理じやその趣をもなるがこゝしも出しいふくを
ぶずふ故らうイヤくその言でなまく来て
いふずふ理でハ独がいふまでも落着ね拙の
切ていひましたその孫の婚まハ彼なさるがの
拝れかくせ切なるお世話まで葬式も外聞
よく済ぞ拙をよるまんでせめてハ父さまのなさん

のるをまつこのひろう一ろくんのお影因てもおわん
ゆうてもあるを向の戒名するのち是ト懐
中より一枚の紙さ〳〵出せば若四季ろくあ〳〵
ゑがきはんかゑれて来る時ハ俗ぐん生涯ぐ捨
ぐんよく苦界のまこと〳〵てよトいをさん〳〵
たぶいとゑごひちの時ハイと涙を流〳〵ほと
お親ぐ見捨きあとゆとゆゆ〳〵いはお位牌とこの
世の別れ三と知ッさまらハ俗ぐてちさん〳〵さ

お身ひるもたんといひまする苦界の勉めも父さゑ
のあとおりくべらおるのもゆ〳〵いるのもいとひませね
和ひいゑのこくゑもぐゑををく埼〳〵幸抱〳〵あの
ちゑ〳〵さゑをお親ひゆハ俗系もあるゆ〳〵ゆと足
ゆれゆ親〳〵親ゆさゑ大阪さゑ也ゆくませね親
の因果ぐひゆゑ也〳〵いろ死ゆ式ゆるとゆゆよく
よくおろゆ孝ゆの我孝育ちの身的ハ俗悪
ゆされてゆさろまセト紙の位牌をろ〳〵親ゆ又也

涙のそゝぐあやとゝ絲子が綾ゝ巴の袖あるれば
その日もそるれかろう

要文

琢説弱の巻後編上終